



胡耀邦・中国共産党総書記 記者会見

1983年11月26日

率直に、明快に、自信たっぷりに質問に答えた。身ぶり手ぶりをまじえて話す小柄な総書記からは躍動感が発散した。

© 日本記者クラブ

新井明理事長（司会 日経） 中国共産党中央委員会総書記胡耀邦閣下の記者会見を行います。初めにメインテーブルの皆さまをご紹介します。私の左隣が、宋之光駐日大使です。右端の方が、呉学謙国務委員兼外相です。通訳は、唐家セン書記官です。

中央の方が有名な胡耀邦閣下であります。

私は、司会役の日本記者クラブ理事長の新井明でございます。胡耀邦総書記におかれましては、多忙な訪日日程の中、当クラブでの記者会見に応じていただきまして、本当にありがとうございます。この記者会見には、きょう、内外の記者が多数参っておりますが、できるだけ率直に質問に応じてくださることを希望いたします。

それでは、胡耀邦総書記からごあいさつがたがた、日本訪問の印象をごく簡単にお願いたします。

胡耀邦 まず、新井先生からいただきました大変友好的なごあいさつに感謝いたします。ご出席の報道界の皆さま、友人の方々と、このようにお会いできるのを大変うれしく思います。

貴国を訪問して、きょうはすでに4日目です。まず私は、貴国が国を挙げて、皆さまの並々ならぬ努力によって、その山河が麗しく見事なものになっていることを、この目で確かめました。第2に日本はすでに経済的にも科学技術の面においても大国になったというありさまを、この目で確かめました。

第3、日本の朝野各界、広範な国民大衆が、私どものこの代表団に対し、大変温かく友好的に歓迎してくださっていることを、身をもってつくづく感じ取っております。

第4、私は、貴国の朝野各界が、中日の間

に長きにわたって善隣友好関係を維持、発展させることに対し、非常に強烈な願いを持っていらっしゃることを感じ取っています。これらすべては、私と私の同僚の人たちに大変深い深い印象を残しました。

したがいまして、私は、まずこの席をかりて、貴国政府をはじめ、貴国の朝野各界の人士、また日本国人民全体に対し、深く深く心から敬意を表したいと思えます。

以上でございますけれども、ただいまから皆さまの質問にお答えしたいと思います。

司会 それでは、質問される方は挙手を願います。指された方は前方のマイクまで進み、社名、氏名を名乗ってから簡潔にお願いします。

浅井（朝日） まず国際関係をちょっと集約する形で3点おたずねしたい。

胡耀邦 私の頭脳の反応の問題も絡んでおりますので、いかがでしょうか、一つ一つ質問をしていただいて、私は、その都度お答えしたいんですけど。

浅井 それでは、まずお聞きしますが、きょうの夕刊で、中国の外交官がアメリカに亡命するという——これはアメリカの発表ですが、そういうニュースが出ております。

胡耀邦 テレビで拝見しました。

浅井 米中関係では、来年の1月に中国の趙総理がアメリカへ行かれるし、レーガン大統領が来年の4月に北京を訪れる、と私たちは理解しております。その米中関係のスケジュールにまさか影響はないと思えますが、質問は米中関係についてです。そういう中国とアメリカの首脳外交というものが、単なる友好

的なものなのか。それともいまの台湾を含むアジア情勢をかなり変える意図を持ったものか。その点について、総書記の見解をうかがいたいと思います。

胡耀邦 もう少々具体的にお話しになっていただけないでしょうか。意図の問題ですね。

浅井 アメリカとの関係について、きのうから日本の総理ともいろいろ語られたということ、すでに我々は報道しています。中国としては、この首脳交流、それから米中関係をこれからどういうふうに持っていくのか。単なる友好だけなのか。それとも大きな戦略的な意図を持ったものなのか。

胡耀邦 中国のある者が、いわばアメリカへ亡命したがる、こういう具体的なことにつきましては、私はまだ知りません。しかし、こういう事例の発生はあり得るでしょう。中国の人口は10億はあるでしょう。したがって、仮に100人、あるいは1000人、あるいは1万人出かけてもたいしたことではございません。

実は、かつて私たちの鄧小平同志はカーターアメリカ前大統領に、こう言明したことがあります。「もしあなた方が、私たちの海外へ出かけたがる者を受け入れる用意があるならば、1000人を送り出しても構わない」と。

一部の出かけたたい者は、おそらく中国でのいまの生活は、まだ困難で、経済が割合に遅れていると思っているのでしょう。

お国のテレビドラマに「おしん」というのがありますね。数十年前の話ですけれども。その生活、家庭環境は大変貧しくて困難でしたけれども、しかし、「おしん」という女性は、あくまで我慢して、つらさ、困難さをものと

もしませんでした。お国の「おしん」は、中国のああいう亡命者より1万倍も賢明ではございませんか。

中米両国の首脳相互訪問の件は、いまから1カ月ないし2カ月ほど前に決められたことです。中国の外交は、独立自主という原則を踏まえて、平和共存5項目の原則を貫き、それを基礎にしてあらゆる国々と平和友好の関係を発展させていくということです。

したがって、中国は、きょうは彼と連合してもう一人に反対し、明日は逆にもう一人と連合して彼に反対する、というようなまねはしません。

中米両国首脳相互訪問が、最終的に成功し得るかどうかということにつきましては、まだしばらく見守る必要があります。と申しますのが、相互訪問の件について話し合いがされてから、1件ないし2件の不愉快なことがあったからです。

アメリカ上院の外交委員会において、先日、台湾の全島に関する提案というものが採択されたのは、そのうちの1件です。その内容は、台湾が中国に統一されるには台湾のあらゆる人々の同意を得なければならない、というのが急所です。

私たちの方から何人かのパイロットが向こうに行ったでしょう。彼らは、果たして受け入れて賛同するでしょうか。

これらは、すべて中国の内政に干渉するための口実にすぎません。すでに私たちは向こうに、書面をもって抗議を申し入れました。そのほかに口頭の言づて、伝言も行いました。アメリカ政府は、これに対し、そのうち公式の返事をしてくださることを約束しました。

もしこの問題に対する彼らの返事がよくな

ければ、訪米出発3日前であっても、予定どおりに行くかどうかを考えざるを得ないわけです。しかし、私たちは、そのような事態が起り得ることを望んでおりません。

私たちは、中米両国の関係が仮にいまより前へ発展するようなことがなくても、現状にとどまるように望んでおります。現状よりもっと前へすばらしく発展するのは好ましいことです。

と申しますのは、これは中米両国の根本的な利益に合致している問題であって、全世界の平和と安定にもかかわりを持っている問題だからです。よろしいでしょうか。

浅井 まだ質問があるんですけども、ほかの人に譲ります。

辻（毎日） 内政についてうかがいます。今回、総書記が来日されまして、日中の永遠友好善隣のため大きな努力を払われました。その希望を果たすためにも、両国の指導部と政策あるいは路線が安定していなくてはならない。中国が今後、この友好の路線をどう継続し、保証していくかということについて、総書記のお考えを承りたい。

それから、中国共産党は整党運動を始めたわけですが、3年終わった段階で大体どのくらいの黨員を入れかえるということになるのか。以上2点です。

胡耀邦 まず2番目の質問の方にお答えしたいと思います。私たちは、国内の政局が年ごとに安定していると感じています。今後の政局も年ごとに安定するようになっていくと信じております。

なぜ私はこういうふうにお話しすることができるか。その一番根本的な要因は、私たちの

いまの政策が中国の広範な民衆、まあ100%といわなくても、少なくとも98%の人々によって衷心より擁護されているからです。

このような政策に賛成せず、あるいは改めようとするような者はあるのでしょうか。ごく少数の人があるのは避けがたいです。もしいまの政策に賛成しない者が10万ぐらいいるとするならば、中国の人口全体から計算しますと、結局、1万分の1ぐらいですね。1万分の1という微々たるものですから、一体どこにいるかが分からないぐらいです。でも、やはり100分の1を占めているでしょう。

あることに対して、もし人民の大多数が、これをひっくり返すことに賛成しないということであるならば、仮にある者がこれをひっくり返そうと図っていても、ここ数十年の私の経験に照らしてみれば、それははなはだ実現が不可能です。

私たちはてきめんに効果が上がるように、いまの政策を堅持するように手を打つと同時に、組織の面においても一連の措置を講じたいと思います。

外国の一部の友人は、いま、中国には鄧小平、陳雲、胡耀邦、李先念、趙紫陽というような指導者がいて、まあ、中国は大丈夫であるとみているようです。しかし、鄧小平はすでに79歳です。もしいなくなれば中国はどうなるのでしょうか。胡耀邦、趙紫陽も年です。もしこの二人も亡くなれば、中国がまためちゃくちゃになるのではないか。私は、外国の一部の友人がこういう疑念を持っておられることも知っております。

しかし、前の波は後の波によって押し上げられていくように、波ごとにますます上がっていくでしょう。

私は、先日、中曽根総理大臣と話し合った

とき、いま、中国には3つの部隊があるということをしあげました。鄧小平同志らは第一部隊ですね。先輩ですから。私と趙紫陽さんは第二部隊。おそらくここに座っている呉國務委員兼外交部長も、第二部隊に属しているのではなかろうか、と中曽根さんにもお話ししました。

いま、私たちは第三部隊を結成しております。40歳、50歳、あるいは30過ぎた人たち、あるいは50を過ぎた方々を物色して第三部隊をつくっております。

私は、ここで皆さまに一つ、半ば公開された秘密を明かしたいと思います。来年、私たちは1000人の幹部を選んで、中央省、特別市・地区、普通の市、この3つのクラスの指導層を補充、強化したいと思います。

この1000人の候補者たちの一部は結局、人材にならないでしょう。しかし、1000人ですから、真の人材になる方もやはりいるでしょう。例えば、今回、私たちの一行には王兆国さんが入っております。この方は、いま中国共産主義青年団の第一責任者です。ことし42歳です。王兆国さんは、そのうち本当の人材になれる対象の一人かもしれません。しかし、私は、ここで確定をすることはできません。なぜならば、それは実践によって証明、立証されなければならないからです。

これから実践による点検を経なければならないんです。現段階では、彼は多分私よりまだ物事を運ぶ場合のレベルが幾らか低いかもしれません。ですから現段階では、私は彼の前でまだ幾分先輩ぶっても結構なのです。

しかし、自然発展の法則もございますので、私は、果たして21世紀まで生きていけるかどうか問題です。おそらく90年まで生きるのにまた大いにもがかなければならないでしょう。

しかし、王兆国さんに代表されているような若者のグループ、彼らは私たちより優位に立っております。もし意外なことがなければ21世紀まで生きられ、私たちがいま予定している路線、方針、政策を引き続き貫徹、遂行していくことができます。

私たちの整党の問題に関する質問にお答えしたいと思います。

私たちの整党に関する決議は非常に長い文書で、中国の漢字では1万字以上です。私たちが行う整党の目的、またその結果は、中国共産党の優点をさらに大きくし、私たちの欠点を乗り越えることができると私は信じています。これによって私たちの党はより一層かたく団結でき、またさらに活気に満ちあふれて力強く前進し、いま私たちが直面している私利を図りあるいは官僚主義的に走るような、こういう重大な欠点、欠陥を克服することができると思います。

3年間にわたる党の整頓によって、果たしてどれだけの党員を入れかえなければならないかという具体的な数字について、私はいまはっきりと申しあげることができません。

全く例え話ですけれども、たとえば100人の党員から1人の不良を排除をするということにでもなれば、いま中国の党員は4000万ぐらいでしょう。ですから、100の中から1人を排除するというにでもなれば、40万ぐらいですね。しかし、これは全く例えの話です。ですから、40万にならずという可能性もあれば、これより多くなる可能性もあります。

仮に中国共産党党員にならなくても、幹部だった人は、これまでどおりに幹部として活躍し、技術者だった人は、これまでどおりに技術者として活躍することもできます。ただし、党員になる者は、どうしても党員として

の条件に合致しなければならず、すなわち人民大衆の間に率先垂範をしなければならない。

質問された先生は、厚意を持って私たちのいまの整党に関心を持ってくださっているのでしょう。こういう党の整とんをしていくなれば、またもや17年前のような、ああいう文化大革命の二の舞を踏むのではなからうか。確かに厚意を持ってこういう疑念を抱いている方がいるんですけども、私ははっきりと表明できます。文化大革命のようなああいうやり方は、もう二度と返ってこないわけです。私たちは過ちを繰り返したくはございません。

党の整とんを経て中国の政局は一段と安定し、中国の経済もよりよくなるものと私は確信しています。友人の皆さんにもご安心いただくよう期待します。

岡田（日経） 経済問題について質問いたしたいと思います。胡耀邦総書記は、たびたびにわたって、経済については心配することはない、ということをおっしゃっています。ところが、最近、北朝鮮の代表に対して、「中国は、また3年ないし5年の経済調整が必要になるかもしれない」ということをおっしゃったと伝えられています。まず、これは事実かどうか。事実とすれば、どうしてそういう調整が必要になったのか、原因についてうかがいたい。

胡耀邦 このうわさ、この伝聞は確実なものではございません。あり得ない。しかし、中国経済の改革は、いまなお未完了です。いま計画的に一步一步と推し進めております。

こういう質問の仕方は大変結構ですね。簡潔で。

岡田 それではもう一つ。これは何回も出て

いる質問です。が、日本側はまだ答えに満足してない、つまり、日本の経済界には中国経済がどうもまだ不安定な局面が多いという懸念がある。安心しなさいという総書記の話があったんですが、安心する材料として、どうして我々が安心できるのかということについて、さらにもう少し突っ込んで具体的にお話ししていただければ幸いです。

胡耀邦 大変スケールの大きな質問です。中国共産党の三中総以来、もう5年たったでしょう。ここにおられる皆さんは報道界の方々に、情報が私より早いんじゃないんでしょうか。あれ以来5年、中国の経済はますます健康的に成長し、前進しているということをお感じにならないんでしょうか。

私は、ここで責任を持って皆さんにお話しできます。私たちのことしの経済事情は、予想したより幾らかよくなっているわけです。

そして、ここでまた皆さまに一つ約束をしたいと思います。中国の経済は、来年になるとことしよりよくなるわけです。もちろん、私たちには欠陥もたくさんございます。これらの欠点を引き続き乗り越え克服する必要があります。

皆さん、日本の報道界は、数カ月ほど前に、中国の官僚主義ということについて、いろいろとたくさん報道されたことがあります。しかし、最近、こういう報道がなくなりました。私がむしろ不思議がるぐらいです。

私は、これらの欠点を真剣に克服する。直すために、誠心誠意を持って対処する。それで、皆さんには私たちの経済活動の面の欠点を指摘するような報道をされるようお願いするわけです。

司会 まだまだ質問があるのですが、もう時

間がございません。ここで……。

胡耀邦 時間がなければ次の機会に譲りましょう。また皆さんにお会いできる機会があると思います。

司会 非常に率直なお答えで、大変感謝しております。それでは、これをもって記者会見を終わります。

胡耀邦 平和友好、万歳。(拍手)

文責・編集部